

加賀乙彦

生と死と

文学

加賀乙彦

生と死と

文学

生と死と文学

1996年 4 月10日 印刷

1996年 4 月25日 発行

著 者 加 賀 乙 彦

発行者 富 岡 勇 吉

発行所 株式会社 潮出版社

〒102 東京都千代田区飯田橋 3-1-3

電話 (3230) 0781 (編集)

(3230) 0741 (営業)

印刷・明和印刷 付物・栗田印刷 製本・東京美術紙工

©1996 Otohiko Kaga

(落丁・乱丁本はお取り替えます)

ISBN 4-267-01399-3 C0095 Printed in Japan

生と死と文学／目次

北フランスの暗い日々 11

『フランドルの冬』の日々 14

フランドルでの再会 17

五十年前の昔話 22

昭和二十年という不思議な年 25

戦後五十年の日本と私 29

重層する戦争体験と私の戦後 33

*

阿南惟幾 40

東条英樹 42

田中静壺 44

*

わが神戸ボランティア記 46

ガン告知について 53

日本人の死生観と尊厳死の宣言 57

人間の死をどう考えるか 66

『生きている心臓』について 70

脳死は人の死 74

「尊厳死の容認」は避けて通れない 78

オランダにおける安楽死の疑問 82

死刑と脳死 89

死刑再開に抗議す 92

死刑囚の生と死 94

忘れられない死刑囚 103

玉井策郎『死と壁』を読んで 107

私の九死に一生体験 111

「差別」としてのエイズ 115

大学病院への提言 120

*

尊厳死の宣言書 倫理委員 死刑囚の実態 戦争小説

大都市と災害 神戸の思い出 125

*

道標としての大江文学 133

現代のドンキホーテを描く 大江健三郎の三部作 140

大江健三郎と魂の文学 145

野上彌生子の長篇小説 148

野上彌生子さんの書齋 168

『吾輩は猫である』と『坊ちゃん』 171

『断腸亭日乗』の個性 176

無意識の影響 二葉亭四迷 181

野間宏さんの思い出 186

青春の読書と小説 190

野の花と森の風 福永武彦『玩草亭百花譜』 195

吃驚する人 202

長老としての本多秋五さん 206

*

晩年の谷崎を生き生きと伊吹和子『われよりほかに 谷崎潤一郎最後の十二年』
独創的な道元論 門脇佳吉『身の形而上学』 213

日中文学者の交流 216

懐かしい詩情の戦争の日々 佐岐えりぬ『京都清閑荘物語』 220

言葉に隠された意味を推理 江川卓『謎とき』カラマーゾフの兄弟』 223

日常性に潜む過去の翳り 高橋昌男『夏至』 225

戦争末期の確かな青春 津村節子『茜色の戦記』 232

静謐な諦念の世界 上田三四二『死に臨む態度』 235

不可解な苦難が新鮮である W・スタイロン『見える暗闇』 239

さわやかな写真家の一生 三神真彦『わがままいっぱい名取洋之助』 244

創造の核と友情 高井有一『立原正秋』 249

死と再生を主題にした秀作 遠藤周作『深い河』 253

おいしい話が満載 牧羊子『おいしい話つくって食べて』 257

ある精神科医の奮闘回想記 栗原雅直『壁のない病室 ある精神科医の記録』

志賀直哉の世界 268

私の好きな文章 プルースト『失われた時を求めて』 270

自己の曖昧さと崩壊 多田富雄『免疫の意味論』 273

売れないモノの氾濫のなかで 栄久庵憲司『モノと日本人』 276

ラカンの謎を解く明快な書 鈴木瑞実『悲劇の解読 ラカンの死を越えて』 279

*

戦後世代が描いた悪夢 映画『シンドラーのリスト』 282

悲惨のなかに心温まる抒情映画 「コルチャック先生」 286

恩讐を越えた中国人の温かい心 映画『乳泉村の子』 289

「頑固老人」を後味よく描く 映画『ダニエルはあちゃん』 291

見る人によって変化をとげる 映画「かぼちゃ大王」

294

あとかき

299

装丁
田村義也

生と死と文学

北フランスの暗い日々

北フランス、フランドル地方の精神病院に医師として勤めたのは、一九五九年の春からである。病院はカレー港近くの小さな村にあり、もちろん日本人は私のほかは一人もいなかった。一年半余、パリ大学の付属病院で研修していて、多少はフランス語に上達はしていたけれども、それまでは主任医師のうしろについて見学していればよく、責任のある立場にはいなかった。それが、急に医師として大勢の患者の治療をまかされた。言葉が通じなければ精神科の診療などできるはずがない。まずは必死で会話の習得にはげむ毎日になった。幸い私の病棟の院長は親切な人で、彼の夫人も医師で私の同僚であり、二人して私の足りない所を補ってくれたため、私のような者でもどうにか医師としての責任をはたすことができた。

この地方は、まったくの田園地帯で、春と夏は、^{はたけ}畠や森の景色が美しく、パリとはまるで違う地方性豊かなフランスが見られた。医長の一家は子たくさんで、家族ぐるみで私と親しくしてくれ、休日には海岸や森に私と一緒に出掛けてくれたりして、私はおおいに慰められた。同僚の医師たちとも友達になり、村の司祭や住民にも知り合いができた。相変わらず何かと苦勞の多い毎日であったが、自然の美や人々の温かい人情に支えられて、何とか人並みの生活を続けていた。

ところが、冬になったとたん、毎日が霧と雨の暗い日々となった。午前十時ごろまで暗く、午後三時には日が暮れてしまう。濃霧の日は昼でも夜のようだ。それに凍^こてつく寒さである。氣候の悪さに加えて、それまで無意識に突っ張って過ごしてきた精神の疲勞がたまってきた。私はすっかり憂うつになり、病院の仕事を終えて医師寄宿舎に帰るとベッドに倒れこみ、物思いにふけた。

はるかに遠い日本に生まれた自分が、いまフランスの僻^{へき}地^ちに来て、孤独なうちに生きている、この生の実態とは何なのか。なぜ自分は日本人に生まれたのか。自分は何をしたいのか。疑問はつぎつぎに襲いかかり、私は解決できないまま苦しんでいた。

ある日、私はおさえがたい衝動に駆られて一冊のノートを買ってき、自分の思うことを書きつけてみた。その時気がついたのは、自分の憂うつ^{ううつ}の元に日本語への飢えがあつたという事実である。私は両親に向けて手紙を書くとき以外は、日本語を書かず、日本語の本も読まず、日本語から遠ざかつていた。それは、フランス語を習得するためにわざとしていた術策であつた

のだが、そのために自分の精神の芯にある大切な部分が崩壊しつつあったと気づいたのだ。

私は暇があればノートに向かつてペンを走らせた。まずは身近な環境の写生から始め、病院の医師、看護婦（看護尼とでもよぶのか彼女たちにはシスターが多かった）、患者、村で知り合った人々の特徴をなるべく詳細に描写しようとした。小説を書いた経験などまるでなかったが、ノートを取っているうちに自分が何か文学作品らしいものを書いていくという自覚が起こってきた。そこで書いた文章を推敲しはじめ、この際限もない作業がよい気晴らしになった。

日本語で書くという行為が、自分の孤独と憂愁を癒し、精神に一種の秩序をもたらしてくれた。書くにつれて私の心の闇に明るみが増して行き、私は元気になって行った。

一九六〇年私は日本に帰ってきたが、それから七年経って、フランスで書いたノートを核にして、最初の長編小説を完成させたのである。

——1994年3月15日「朝日新聞」

『フランドルの冬』の日々

一九六〇年の春、二年半のフランス滞在のすえ東京に帰ってきた私は、東大病院精神科助手としての、猛烈に多忙な生活に巻き込まれた。フランスでは、医師は割合に悠々と暮らしていたし、とくに一年間医師として働いた北仏の病院では、午前中働けば午後と夜は全く暇という有様だったから、日本での、おのれの心を刻々に傷つけられるような毎日にはまいった。

が、人間とはどんな状況にも馴れる動物である。しばらくすると臨床や研究にぶんぶん振り回されている日常にも馴れてしまった。そのころ週一回、私は府中刑務所に犯罪者の診察や研究のため通っていた。帰り道に国分寺の辻邦生の家によく寄った。庭に奇妙なトータムポールのある二階家で、彼は新進作家として小説の創作に没頭していて、文学の話をよく交したも